

住民どうしの 共助で防ぐ



水害の自主避難マップをつくった蓼原集落のみなさん。
後列右が自治会長の仁張衛さん

ここで暮らしていくためにつくった

水害避難マイマップ

京都府福知山市大江町・蓼原自治会

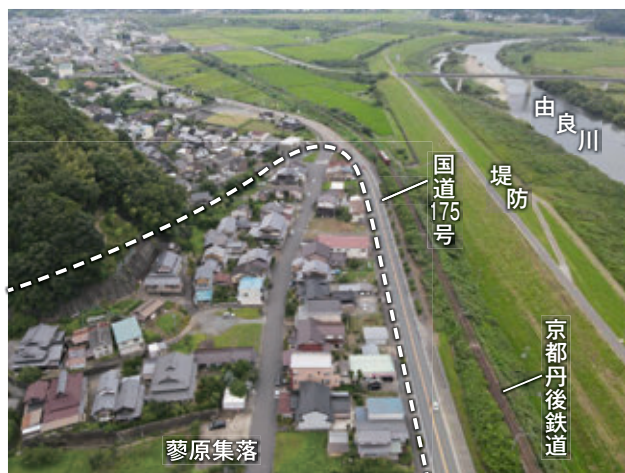
文・写真 | 編集部



川とともに生きる

福知山市の市街地から車で約30分。一級河川・由良川沿いに延びる大江町蓼原は、57戸130人が暮らす集落だ。

江戸時代には舟運の港として栄え、多くの商家が立ち並んだ。今でもメインストリートには、写真館や和菓子屋、理容店、製材所など、代々の家業を引き継ぐ店が多い。また、1950年代まで養蚕が盛んだったことから古い家屋は天井が高く、当時の名残をとどめている。



16年に念願の堤防が完成。由良川からの浸水はなくなったが……
 写真提供=蓼原自治会 (以下、Tも)
 *堤防で守られる集落は堤防の内側で「堤内地」といい、川の水が流れるところは「堤外地」となる



水害の歴史を語り継ぐことが、私たちの責務

自宅の外壁に浸水の高さを掲示する
 荒木伊佐男さん(89歳)。2000年以降、3回の床上浸水を経験した

一方、低地の蓼原は水害の常襲地帯でもある。台風や豪雨のたびに由良川が氾濫し、浸水被害を繰り返してきた。

*

「今年は大雨が来るといいね。もう水害はたくさんじゃ」

「そやなあ、もう歳やで家の中に水が入ったら、畳を上げる体力がない」

梅雨のシーズンが近づくと、集落の間ではそんな話題が増えてくる。それでも、ひとたび水害が起これば自治会で決めたルールに従ってみんなで助け合う。

「このマップは、自分たちでできることを考えてつくった蓼原独自の自主避難計画です。『誰ひとり犠牲者を出さない』のスローガンのもと、この先も住み続けられるようむらにしたい」と自治会長の仁張衛さん(65歳)はいう。

災害は忘れたころではなくなった

仁張さん曰く、江戸時代から昭和20年代にかけて蓼原集落の歴史を紐解くと、比較的大きな水害は50年ほどの周期で繰り返されてきた。しかし、気候変動の影響からか、2000年ごろから雨の降り方が変わってきたという。実際、台風や